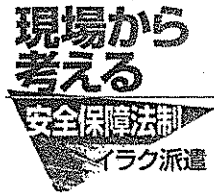


陸自文書 黒塗りだらけ

野党抗議 採決後に全面開示

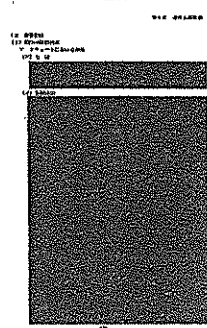
安全保障関連法案をめぐる国会審議のさなか、多数の黒塗りがあった陸上自衛隊の内部文書「イラク復興支援活動行動史」が開示された。黒塗り部分が明らかにしたこと、危険と隣り合わせだった当時の生々しい活動の実態が鮮明になり、安保法案が抱える問題点も浮かび上がった。2008年に陸自が文書を作ってから約7年、自衛隊の活動に関する政府の情報開示のあり方が問われる。▼1面参照



宿営地に攻撃 「撃て」の指導

この文書の存在が国会で明らかになったのは7月10日の衆院特別委員会。野党の議員の要求に対し、防衛省は当初、一部を黒塗りにしたものしか提示しなかった。黒塗り部分は全体の約4割を占めた。

野党が「公開してもらわない」と美のある審議ができないと迫ると、5日後に委員会では法案の採決が先行された後、全面開示された。「行動史」は、陸自の調査



黒塗りにされていたページ



黒塗りが解除された後の同じページには、小銃や機関銃、対戦車砲の射撃訓練の写真などが掲載されていた

「行動史」で防衛省が黒塗りにした部分

項目	黒塗りにされていた記述
訓練	至近距離射撃訓練を重視して実施した。
治安	迫撃砲弾やロケット砲弾による宿営地に対する攻撃は合計10回以上発生した。一つ間違えば甚大な被害に結びついた可能性もあった。
武器の使用	最終的には「危ないと思ったら撃て」との指導をした指揮官が多かった。
メンタルヘルス	約2割の隊員にストレス傾向がみられた。
家族への支援	派遣を聞かされてうろたえた両親がいた。
他国軍との連携	多国籍軍内の日本隊の地位が不明確であるため、相互の意思疎通が不十分な状況が、情報収集、軍民協力、情報作戦の面で発生した。オランダ軍が要請したことが、日本隊では「当然できない」ということがあった。
装備	装備品の17%が整備不良。引き金が作動しない拳銃、ボンネットがへこんだ車両、探知能力不良の地雷探知セットなど。
情報	アラビア語や部族についてのハンドブック、ジェスチャー集を作成し、各隊員に配布・普及した。

研究部門「研究本部」が編集した後に陸幕が部内向け報告書として完成させたという。

行動史はできるだけ多くの隊員にイラク派遣の教訓を伝えるため、法令上の秘密指定を避け「注意」にとどめた。編集した幹部の一人は「機密事項が入った詳細な原本は別途、金庫内に保管されている」と話す。しかし、「注意」にとどめた文書ですら、情報公開請求で出されたものには、数多くの黒塗りがあった。何が伏せられていたのか。非開示が目立つのは、「情報」「通信」「部隊編成」「安全確保策」「多国籍軍」などの分野だ。

公開基準の議論を

たとえば、2005年12月にルメイサで隊員が群衆に取り囲まれ銃を撃つかどうかの判断を迫られた事件。また宿営地への迫撃砲やロケット砲による攻撃についての記述も黒塗りが。テロリスト相手の至近距離射撃の訓練や多国籍軍との密接な連携要領、また「最終的には『危ないと思ったら撃て』との指導をした指揮官が多かった」などの記述も伏せられた。防衛省は、開示すること

視点

陸上自衛隊の内部文書をどこまで開示するか。その判断や基準は、政府に委ねられていた。イラク派遣の現場で、どんな危険な場面があったのか。隊員がどのような訓練

た「極秘文書」が別に存在するとう。

これでは、イラク派遣の実態を検証するのは極めて困難だ。自衛隊が得た教訓が何だったのか。今の安全保障関連法案で、国民が何を基準に判断すればいいのかわからない。

そもそも情報公開制度は、「知る権利」にもとづき市民が行政文書を直接チェックできる手段の一つだ。「行動史」の作成は08年。今回は野党の強い働きかけで開示されたが、特定秘密保護法が導入された今後は、国会議員にさえも開示されない箇所が出る可能性がある。

国会は安保法案が抱える問題点とともに、自衛隊の活動にまつわる文書の公開基準についても、徹底的に議論すべきではないか。

(谷田邦一、三輪浩志)